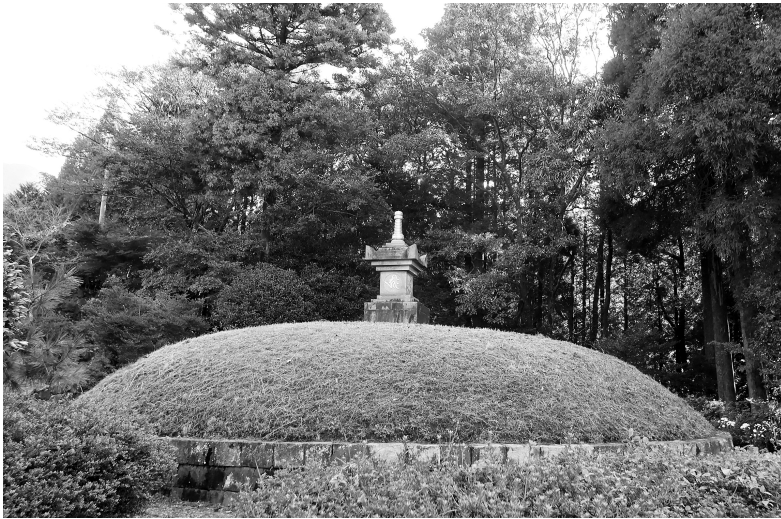


十二時^{じゅうにとき}法語

（銀杏誌昭和六十二年三月号より
昭和六十三年三月号まで連載分）



宝篋印塔

大智禪師十二時法語

このたびは、大智禪師の十二時法語について、お話し致したいと思います。

その理由は二つあります。

一つは、私が大智禪師の勝蹟である九州菊池の聖護寺の責任者となって十年、今年十三回忌を迎える鈴木素田大和尚の後事を継承するという因縁を戴いているということ。

一つは、大智禪師が、高祖道元禪師六代目の嫡孫であられ、従って太祖瑩山禪師二代目の法孫であつて、両祖大師に最も近いお方の一人であり、その方が参禪指導にあたつてどういとお示しをしておられるかということ、坐禪が盛んに行なわれている時だけに大事なことでだと思つて、参じてみたいと思つてあります。

私が聖護寺に初めて拝登したのは昭和四十年の秋で、大智禪師の六百年の遠忌法要の時でありました。丁度その年は大本山總持寺二祖国師峨山禪師がきんの六百回大遠忌に正當いたしており、宗門を挙げての報恩の行事が多彩に営まれていました。

同じ年回到に正当しながら、大智禪師の大遠忌の法要はどこも行なわないのではないか。もしそうだとすれば実に申し訳のないこと。大智禪師は宗門人の誰もがその法恩に浴している。列祖の中にも特筆すべきお方である。偈げじョ一つを取り上げてみても、今でこそ詩偈に無関心な者もいるが、昔の人は大智偈頌といえ小僧時代から口誦させられたものだそう。その大恩人の遠忌を何処も営まないとは如何にも残念だと。聖護寺を復興せられた村上素道老師のご法嗣で、当時その遺志を継いでおられた、鈴木素田師の熱烈なる計画で、この深山の聖護寺で大法要が行なわれたのであります。

素道老師は昭和十年、当時長崎皓台寺こうたいじの住職であられながら聖護寺を建立され、この年に大梅塔司という名目で仮本堂を建て道海法嗣を駐留させられています。そして、昭和十七年には皓台寺を辞して、十名程の門下雲衲を伴ってこの山中に入り、太平洋戦時中に本堂庫院等を建立する等、戦後も万事不自由な時代に老齡不如意の病軀をも顧みず、彼の山中で超人的な教化をせられたのであります。が、昭和三十九年十一月末、大智禪師の六百回遠忌を目前にして遷化せられたのであります。

その遺志を継がれた鈴木素田師が、橋本恵光老師を請せられたが、不幸にして橋本老師もその年に遷化されたので、橋本門下の人達を中心に鎌谷老師を導師として遠忌の法要を

つとめたのであります。

爾來、師は在住十年程の間に仏足石の勧請、宝篋印塔の造立等、縦横の活動をして昭和四十八年十二月十五日、突如として化を他界に遷されたのであります。

訃報により飛錫、葬儀を私が行なうという羽目になり、図らずも、後事を引継ぐ重責を担うことになりました。昭和五十一年末に宗門寺院入籍の手続きを終え、翌五十二年四月八日、私が後任住職の決まるまで当分兼務することになった次第であります。

一昨年は安岡正篤先生、今春は横溝光暉先生と、外護の大御所が相続いで逝かれ、時代の大きく転移することを痛感している昨今であります。

十二時とは現在の二十四時間のことであります。一日二十四時間、切れ目のない行持、これが禅の修行生活であつてその心得、用心を教えられたのが、この十二時法語であります。

さてこの法語が何時、誰に示されたかは判然としません。が、余程の身分の人に示されたものであろうということです。また本文に「辰ノ時イマダ世間モスコシ暗クバ云々」とある点から察して、時は鎮西の臘月であらうということです。とすればこれは延元元年の暮、京都の虎口を脱して帰国し、早速に広福寺の禅師の会に参じた武重公に示されたものであらうと

いう説。と、また一説は、大智禪師、寂阿禪門（菊池肥後守藤原武時入道）に示す十二時法語と洞上正宗訣にも出ているのであるから、これは武重公の父君武時公であり、広福寺開創の元徳二年、禪師四十二才、武時公四十才の頃の法語であろうという説。と、ありますがこれは後日のことにして、本文に入りましょう。